

## 『青年』

一体日本人は生きるということを知っているだろうか。小学校の門を潜<sup>くぐ</sup>ってからというものは、一しよう懸命にこの学校時代を駆け抜けようとする。その先には生活があると思うのである。学校というものを離れて職業にあり附くと、その職業を為<sup>な</sup>し遂げてしまおうとする。その先には生活があると思うのである。そしてその先には生活はないのである。

現在は過去と未来との間に劃<sup>かく</sup>した一線である。この線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである。

そこで己<sup>おれ</sup>は何をしている。

今日はもう半夜を過ぎている。もう今日ではなくなっている。しかし変に気が澄んでいて、寐<sup>ね</sup>ようと思つたつて、寐<sup>ね</sup>られそうにはない。

その今日でなくなった今日には閱歴がある。それが人生の閱歴、生活の閱歴でなくてはならない筈<sup>はず</sup>である。それを書こうと思つて久しく徒<sup>いたずら</sup>に過ぎ去る記念に、空虚な数字のみを留<sup>とど</sup>めた日記の、新しいペエジを開いたのである。

しかし己の書いている事は、何を書いているのだから分からない。実は書くべき事がある筈で、それが殆ど無いのである。やはり空虚な数字のみにして置いた方が増しかも知れないと思つ位である。